

巻頭言

「古希を過ぎた仲間」

理事長 新谷友良

先日、大学時代の友人の遺作が送られてきました。京都の出版社「文理閣」の発行で、400頁弱のハードカバー、タイトルは「ゲバルトボーイ」となっています。

大学を卒業して10年ぐらいたって、巢作りが一段落したものがぼつぼつ集まり、20人ぐらいで「未定の会」という気恥しい名前の、同窓会のようなものができました。1年に一度ぐらいの集まりが、主に東京で、時々京都で開かれます。去年は東京駅の近くの飲み屋に10人ぐらいが集まり、先ほどの「ゲバルトボーイ」執筆を肴にした馬鹿話に、手話通訳を介して加わりました。

最盛期には25人位いたメンバーから5人が鬼籍に入りました。結婚式の司会をしてくれた演劇かぶれの友人も、集まりの初代世話人も、そして「ゲバルトボーイ」を書いた本人もいなくなりました。それでも、40年続いている集まりに20人近く残っているのは良しとすべきかもしれません。

そんな中、学究肌のYがA4で100枚弱の論文（本人は雑談集とっていますが）を「コメントしろ」と送ってきました。彼は定職を持たず、塾の講師のアルバイトや、給食会社の調理師などをして、今は奥さんと二人悠々自適と聞いていましたが、70歳を過ぎてもこのような硬いものを書いているのが眩しく見えます。

別の友人は、奥さんと二人で全国のマンホールの蓋を調べて回り、「町自慢、マンホール蓋700枚」という本を論創社という出版社から出版しました。マンホール関係の本は結構出版されているようで、アマゾンで検索可能ですが、ブックレビューがゼロなので評判は分かりません。

50歳で会社を辞めた別の友人は、千葉・流山に窯を構えて焼き物をやっていて、「70を過ぎたら青磁を焼けるようになりたい」といっています。展覧会の案内が来ないので作品をしっかり見たことはありませんが、まだ満足した青磁は焼けていないのかもしれない。それでも飲み会では「皆の骨壺を作る」と公言していますので安心です。

会のメンバーも古希を過ぎて数年経ち、それぞれが自分のこれからの居場所を確認しているようです。未定のまま「サケは母川に帰る」ように、今年もまた、どこかに何人かが集まることと思います。